

芥川龍之介とパンデミック（スペイン風邪）、そして〈諏訪〉

フェリス女学院大学名誉教授 宮坂 覺（66 回生）

資料①

内務省衛生局編『流行性感冒』（1922 大正 11 年）

日本におけるスペインインフルエンザの被害				
	流行時期	患者	死者	致死率
第1波	1918(大正7)年8月 - 1919(大正8)年7月	2116万8398人	25万7363人	1.22%
第2波	1919(大正8)年8月 - 1920(大正9)年7月	241万2097人	12万7666人	5.29%
第3波	1920(大正9)年8月 - 1921(大正10)年7月	22万4178人	3698人	1.65%
合計	1918(大正7)年8月 - 1921(大正10)年7月	2380万4673人	38万8727人	1.63%

資料② 『菊池寛「マスク」』（改造）1920 大正9年7月

丁度その頃から流行性感冒が、猛烈な勢で流行りかけて来た。医者言葉に従えば、自分が流行性感冒に罹るとは、即ち死を意味して居た。――(中略)――
 最善の努力を払って、罹らないよに、しようと思った。他人から臆病と嗤われよが、罹って死んでは堪らないと思った。

自分は、極力外出しないよにした。妻も女中も成るべく外出させないよにした。そして朝夕には過酸化水素水で、含漱をした。止むを得ない用事で、外出するときには、ガゼを沢山詰めたマスクを掛けた。そして、出る時と帰った時に、丁寧に含漱をした。――(中略)――

毎日の新聞に出る死者数の増減に依って、自分は一喜一憂した。日毎に増して行つて、三千三百二十七人まで行くとそれを最高の記録として、僅かばかりではあつたが、段々減少し始めたときには、自分はホッとした。が、自重した。二月一杯は殆んど外出しなかつた。――(中略)――

三月には、は入ってから寒さが一日一日と引いて行くに従つて、感冒の脅威も段々衰えて行つた。もマスクを掛けて居る人は殆どなかつた。が、自分はまたマスクを除けなかつた。

資料③ 『与謝野晶子「感冒の床から」』（横濱毎日新報）1918 大正7年11月10日

この風邪の伝染性の急劇なものには実に驚かれます。私の宅などでも一人の子どもが小学から伝染して来ると、家内全体が順々に伝染してしまいました。ただこの夏備前の海岸へ行つていた二人の男の子だけがまた今日まで煩わずにいるのは、海水浴の効き目がこんなに著しいものと感心されます。――(中略)――

政府はなせいち早くこの危険を防止する為に、大呉服店、学校、興行物、大工場、大展覽会等、多くの人間の密集する場所の一時的休業を命じたのでしょか。

—(中略)—

一般の下層階級にあつては、売薬の解熱剤をもちて間に合わせております。こゝう状態ですから患者も早く治らず、風邪の流行も一層烈しいのではないのでしょうか。

—(中略)—

平等はルソーに始まったとは限らず、孔子も貧しきを憂はず、均しからざるを憂ふといひ、列子も均しきは天下の至理なりといひました。同じ時に団体生活を共にしている人間でありながら、貧民であるといふ物質的の理由だけで、最も有効な第一位の解熱剤を服することができず他の人よりも余計に苦しみ、余計に危険を感じるという事は、今日の新しい倫理意識に考へて確かに不合理であると思ひます。

資料④ 与謝野晶子 死の恐怖 (『女人創造』1920 大正9年5月)

私は家族と共に幾回も予防注射を實行し、そのほか常に含嗽薬(がんそうやく)を用ひ、また子どもたちのある者には学校を休ませる等、私たちの境遇で出来るだけの方法を試みています。こうした上で病気に罹つて死ぬならば、幾分それまでの運命と諦めることができません。幸いに私の宅では、また今日まで一人も患者も出していませんが、明日にも私自身をはじめ誰がどのなるかも知れません。死に対する人間の弱さが今更のこゝと思われず。人間の威張り得るのは生^二の世界においてだけの事です。

資料⑤ 田山花袋 子供と旅 (『花袋文話』1911 明治44年12月 博文館)

明治四十四年の元日は上諏訪温泉で迎へた。山の雪に日が光つて、寒い風が肌に染み渡つた。半凍つた湖水には二三日前まで通つて居たといふ小蒸汽船が氷に閉ぢられて居た。

昨夜遅く此処に着いた。温泉の湯壺は階梯を下りて行つたところにあつた。昨夜も今朝も浴して居る者は一人もなかつた。私はつれて行つた取つて十歳になる男の兒と戯れたが二緒に其処に長くつかつて居た。

資料⑥ 田山花袋 温泉だより (1918 大正7年12月 博文館)

↓岩波文庫『温泉だより』(2007・6)

資料⑧

宇野浩一 (1891年 明治24年) ~ 1961年 昭和36年)

四〇 上下諏訪と諏訪湖

諏訪は上諏訪にしても、下諏訪にしても、温泉場乃至遊覧地としての気分は割合に少なかつた。それは多くの旅舎に、湖水の見わたされるような家の設備がしてないのである。牡丹屋の三階からは、その一面が少しは見えるけれども、人家や煙突が前を遮つて感じが余り好まなかつた。—(中略)—工業に夢中になつて活動しているので、土地の人は、そうした遊覧者乃至浴客をあてにするような消極的な心持を持つことは出来ないのである。万事すべて都会風で、知識も進んでいるし、日常の生活も進んでいる。現に、雑誌新刊物なども此処で売れるものは、他でも売れるので、長野、松本あたりでもこれを標準にして、書籍雑誌を任入れるという事である。

—(中略)—

旅舎ではやはり牡丹屋が好い。主婦が元鷲木の本陣の娘で、先祖代々旅舎をした人たちの血を承けているためか、客の取扱方にあまり上下の隔ても置かず、いやに客にしつこくやほやせず、放つて置いてそして親切にするといふ取扱方である。私も初めはあまりに素気なまざるように思つたが、度々行くにつれて、その最初の感の誤つてゐるのがわかつて来た。これに次いで、布半が静かで好い、下諏訪では、亀屋が好かつた。

資料⑦ 宇野浩一 芥川龍之介 (1933 昭和28年5月、文芸春秋社)

ところが、私と芥川は、皆とわかれて、その日の晩は、京都にとまり、その翌日、京都から名古屋に出て、名古屋から中央線にのりかへて、下諏訪に行くことになつてゐた。わざわざ、中央線にのりかへて、下諏訪に上る事になつたのは、私が、その頃、『天心』と『踊』、『心中』その他の小説に、下諏訪を舞臺にして、その町のゆめ子といふ藝者を、片恋ひの女として、繪巻事にした。それらの小説がいくらか評判になつてゐたので、いたつて(人一倍)好奇心のつよい、芥川が、ひとつ、その女を、どんな女か、見てやらうと思つて、私に、諏訪に行くことをすすめ、僕も君のかく、田國の温泉町を見たいし、ゆめ子女史の顔を見たいから、一しよに行きたいんだ、といひさきか、芥川流の、煽動をしたからである。さして、私もその女を見たくなつたからである。

1918 大正7年 4月、蔵の中(「文章世界」)を発表し、文壇に登場。

7月、江口渙「赤い矢帆」の出版記念会で芥川龍之介を知る。

9月、苦の世界(「解放」)を発表して、新進作家としての位置を築く。広津和郎と上諏訪に仕事のため行く別々の宿。宇野の宿は騒々しく、下諏訪「かめ屋」に移り一週間滞在。鮎子(原とみ・子持ち芸者21歳)を知る。

11月、読売新聞で「文壇一流の売れっ子」の一人(原稿料収入四百円、新年には一千円の収入)と紹介。月末、下諏訪に行き、小竹(鮎子の年上芸者村田キヌ)を知る。

1919 大正9年 1月、大心(「中央公論」)。

2月、谷崎精一と下諏訪に行き、鮎子、村田キヌ(小竹)に会った(4月まで?)。

5月初旬、村田キヌが上京、同棲(11月入籍)。

9月、甘き世の話(「中央公論」)。

11月16日、直木三十五の計画で、芥川、久米正雄、菊池寛、佐佐木茂素とともに、主潮社(各本画家の団体)主催の講演旅行に出かける。*帰途、芥川の希望で、下諏訪に立ち寄る。23日、午前四時、名古屋に到着。中央線に乗り換え、信州諏訪に到着。夜、馴染みの芸妓原とみを芥川龍之介に紹介。下諏訪亀屋ホテルに宿泊。(※滞在中三人で上諏訪へ活動写真を観に出かけた) 28日、芥川龍之介とともに帰京。

1921 大正10年 2月20日夜、芥川龍之介とともに大阪に向けて出発。

▽芥川龍之介、宇野浩二氏は十八九頃大阪に赴く(15日「文芸消息」)

5月、『踊り』(「中央公論」) 6月、『夏の夜の夢』(「新潮」) 9月、『心中』(「改造」)

1921 大正11年 1月上旬、直木と朱曾福島、信濃大町を経て、下諏訪に赴き原とみに会う。

8月、『中恋心』(「中央公論」) 9月、『続山恋心』(「中央公論」)

*宇野の諏訪行は、昭和九年、十二年と続く。

(水上勉は、昭和四年五月一日原とみに会っている月報「宇野浩二全集」)

芥川龍之介 1892年明治25年〜1927年昭和2年)

*芥川龍之介の年譜に関する記述は、すべて宮坂賢編年譜(山形波版芥川龍之介全集「第24巻」)による。

1918 大正7年 11月、日頃、スペイン風邪のため床に就く。ひどく衰弱し、辞世の句を作らざった。

1919 大正8年 2月17日、インフルエンザのため発熱し、田端で床に就く。月末まで床をあげられず、学校も翌月初めまで休んだ。

3月8日、大阪毎日新聞社から役員社員の辞令が届く(原稿料の他に報酬月額は一三〇円)。

13日、実父新原敏三がスペイン風邪で入院する。電報で急ぎ帰京し、この日は病院に宿泊。

16日朝、敏三が死去享年68歳。31日、海軍機關学校英語教授嘱託、退職

5月4日、菊池寛とともに長崎旅行に出かける。菊池は風邪による頭痛のため岡山で下車。尾道で途中下車しながら二人で長崎に向かった(10日まで滞在)。

8月23日、風邪のため、金沢八景の病院に入院。

1920 大正9年 *上段 宇野浩二項目参照

11月28日夕方、宇野浩二とともに帰京する。原とみに札状を書いた。

1921 大正10年 2月19日、大阪毎日新聞社から大阪を命じる電報が届く。20日夜、宇野浩二とともに大阪に向けて出発。▽芥川龍之介、宇野浩二氏は十八九頃大阪に赴く(15日「文芸消息」)

22日夜、大阪毎日新聞社の接待を受け、この席で大阪毎日新聞社から海外視察員としての中国特派が提案され、承諾。3月中旬から約半年間の予定で中国に特派される事が決まった。▽「芥川龍之介氏 本月中旬出発 大阪毎日新聞社から特派員として朝鮮及び支那視察の途に就く」(3月9日「抄」)

3月19日、中国特派旅行に出発。(※7月20日ごろ、体調不良のため帰国。)

1922 大正11年 1月、『藪の中』(「新潮」)、將軍(「改造」)、俊寛(「中央公論」)、神

神の微笑(「新潮」)などの力作を発表。

*中国特派旅行による体調の衰弱は、芥川龍之介の大きな転機となる。健康は坂道を転げるように悪化し、以後苦しむこととなり、作風の変化を齎すこととなる。

資料⑨ 渋川曉「宇野浩二論」(1974 昭和49年)8月、中央公論社

たびたび諏訪に出かけた時代は、彼が蔵の中で文壇に登場し、新進作家として世に騒しく迎えられたときだった。自然、収入も増加していったところ。そのため彼が、この田舎の温泉町でまわりの人たちから歓迎されたことは当然なことであろう。困窮の生活にあっていていた彼にとりて、このような激しい変化は、夢のような出来事に思えたところ。その意識が、いつそ彼に興奮状態をもちましたにちがいない。のみならず、彼はヒステリーで苦しめられた伊沢きみ子からも、いまは解放されていた。しかし、それには虚脱感が大きくもなるとは、先に述べたとおりである。野原の案山子のように、孤独と同時に、落ちつかない不安定感を絶えず覚えていたにちがいない。それは、彼に一種のデカダンスの気分をもたせていたところ。このとき出会うためめ子は、彼にその初心を失わないう品のある容姿と心ばえで彼をとらえ、彼の気持を落ちつかせようとした。しかし、彼女が子持芸者で、どこにも自由にならない身であることがわかると、彼の不安定感は、いつそう揺れださずにはいられなかった。

資料⑩ 宇野浩一諏訪もの(ゆめ子もの)

1920 大正9年、大心(中央公論1)、廿五世の話―新浦島太郎物語―(中央公論9) / 1921 大正10年、「踊り」(中央公論5)、夏の夜の夢(新潮)6、心中(改造)6 / 1922 大正11年、中恋心(正・続篇、中央公論8、9)

資料⑪ 宇野浩一芥川龍之介(1953 昭和28)年月、文芸春秋社

ナニガシ劇場は、名はいかめしいけれど、ときどき、田舎まはりの役名が、三日か五日ぐらゐ、出演する、古風な芝居小屋である。それで、むかしの劇場のやうに、平土間とか、棧敷とかがあつて、それらには『柙』があつた。さして、それぞれの『柙』の中には、まんなかに、櫓火燵がおいであり、その櫓火燵には蒲團がかけてあり、その櫓火燵のまはりには座蒲團がしいてある。

私たち三人は、その櫓火燵を、三方からかこんで、火燵にあたりながら活動寫真を見た。

資料⑫ 花松館／諏訪花松館 (https://heikajcinema.memo.wiki/)

1916年(大正5年)、諏訪地方初の常設映画館として末広町に「花松館」が開館した。当時の上諏訪には大娯楽場として「都座」もあつた。尾上松之助が「目玉の松ちゃん」として

大活躍をし、「ジゴマ」がもはやされる時代だった。昭和初期までは上映されるのは無声映画であり、フロックコートや羽織袴の弁士が、スクリーン脇の演目で状況説明や登場人物の対話などを独演した。上諏訪には都座、花松館、オデオン座の三映画館が鼎立して競い合った。*花松館の建物は2009年頃に取り壊された。

資料⑬ 原とみ宛芥川龍之介書簡(1920 大正9年、一月二八日付)

拝啓

先日中はいろいろ御世話になりありがたく御礼申し上げます。今夕宇野と無事帰京しました。他事ながら御安心下さい。

あなたの御世話になつた三日間は今度の旅行中最も愉快な三日間です。これは御せじぢやありません。実際あなたのやみな利巧な女の人は今の世の中にはまれなのです。正直に白状すると私は少し惚れました。もつと正直に白状すると余程惚れたかも知れませんが、但し気味が悪いから、宇野には少し惚れたと云つて置きました。それでも顔が赤くなつた位です。可笑しかつたら沢山笑つて下さい。

その内にもつとゆつくり十日でも一月でも亀屋ホテルの三階に居てみたい気がします。あなたは唯側にゐて御茶の面倒を、見て下さればよい、いけませんか。どういけなさは気がするため、汽車へ乗つてからも時々ふさぎました。これも亦可笑しかつたら御遠慮なす御笑ひ下さい。

十一月廿八日 芥川龍之介

鮎子様 粧次

二伸いろは単歌の「ほ」の字は「骨折り損のくたびれ儲け」です。今日汽車の中で思ひつきました。

御清聴ありがたうございました